

丸善とタイプライター

安岡孝一

丸善が、ウエリントン・タイプライターNo.2の輸入販売を開始したのは、一九〇〇年（明治三十三年）のことだった。ボストン在住のウエリントン・パーカー・キダーという発明家が、一八九二年に発明したウエリントン・タイプライターを、チャールズ・キャロル・コルビー率いるウイリアムズ・マニユファクチャリング社が改良したのが、ウエリントン・タイプライターNo.2である。『丸善百年史』下巻八三七ページで、このウエリントンを何故第二号と名付けたかと云えば、ウエリントンとはかの有名な英国の大英雄の名前であり、遠慮して第一号とつけなかったからだと云う。英国人らしいユーモアである。

と紹介しているが、これは間違い。ウエリントンという名はキダーのファースト・ネームだし、キダーはメイン州ノーリッジウォック生まれのアメリカ人だし、コルビーもバーモント州ダービー生まれのアメリカ人（ただし当時はモントリオール在住）だし、そもそも最初にウエリントン・タイプライター（図1上）があつて、それを改良したのがウエリントン・タイプライターNo.2（図1下）である。

ウエリントン・タイプライターNo.2の特徴は、スラスト・

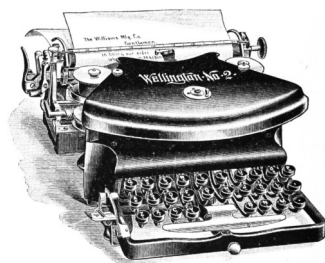


図1 ウエリントン・タイプライターと同No.2

アクションと呼ばれる、当時のタイプライターとしても珍しい印字機構にある。二八個のキーは二八本の活字棒にそれぞれ繋がっており、キーを押すと、対応する活字棒がプラテンに向かってまっすぐに飛び出す。プラテンの前面には紙が置かれており、そのさらに前にはインクリボンがあつて、まっすぐに飛び出した活字棒は紙の前面に印字をおこなう。これが、スラスト・アクションの基本動作である。活字棒の先に



図2 ローヤル・タイプライターNo.10 とコロナ3

は、それぞれ活字が三つずつ埋め込まれていて、シフト機構（ブラテンが持ち上がる）により八四種類の文字が印字可能である。ただ、複雑な印字機構のわりに、ウエリントン・タイプライターNo.2は華奢な作りで、頻繁に修理やメンテナンスを必要とした。

その後も丸善は、何種類かのタイプライターを輸入販売していたが、一九一四年（大正三年）にローヤル・タイプライター社の日本総代理店（朝鮮・満洲を含む）を獲得し、同社のタイプライターの輸入販売を大々的に開始した（二八頁参照）。主力製品のローヤル・タイプライターNo.10は、同社が前年に発売したもので、質実剛健を絵に描いたような四二キ

ーのフロントストライク式タイプライターである。金文字のROYALがキーボード奥とカット紙ガイドの二ヶ所に入っており、円弧状に配置された四二本のアームが特徴だ（図2上）。各キーを押すと、対応するアームが立ち上がって、ブラテンに置かれた紙の前面に印字がおこなわれる。アームの先には、それぞれ活字が二つずつ埋め込まれていて、シフト機構（全アームが下へ沈む）により八四種類の文字が印字可能である。

さらに丸善は、翌年、コロナ3（図2下）の販売を開始している。コロナ3は、一九一二年にスタンダード・フォールディング・タイプライター社が発売したフロントストライク式タイプライターで、セール・フレージャー社が日本での輸入代理店だったが、販売を丸善に委託したものである。タイプライター本体を小さく折りたたむのが特徴で、本体の重さが八ポンド、キャリケースが二ポンドと、旅先へも携帯可能なポータブル・タイプライターだった。二八本のアームの先には、それぞれ活字が三つずつ埋め込まれていて、シフト機構（ブラテンが持ち上がる）により八四種類の文字が印字可能である。

これら丸善が販売してきたタイプライターは、いずれも欧文タイプライターだった。一方、一九二三年（大正一二年）に仮名文字協会の山下芳太郎が、アンダーウッド・タイプライター社のバーナム・クルース・ステイックネーに横書きのカナ・タイプライターを発注し、ドッドウエル商会が輸入販売

を開始した。これを追いかけて丸善も、ローヤル・タイプライター社にカナ・タイプライターを作らせ、さらに一九二九年（昭和四年）にはカナ・ラテン・タイプライターを試作させている。

このカナ・ラテン・タイプライターは、ローヤル・タイプライター No.10 を四六キーに改造した特注品で、大文字アルファベット二六種と数字八種に加え、カタカナ四六種・濁点・半濁点・記号一〇種が印字可能だった（図3）。数字の0と1は、大文字のOとIで代用する。カタカナはシフト側に配置（オを除く）されており、濁点もシフト側にあるので、カタカナを打つ場合は、通常「トメ」（シフトロック）キーを使う。オ・半濁点・長音符（ハイフン）・句読点を打つ際や、数字・アルファベット・その他の記号を打つ際は「トメ」を外す。濁点と半濁点は一文字分進んでしまうので、見映えを良くしたい場合は、直後に「モドシ」（バックスペース）キーで戻す。ただし、小文字のアルファベットも、小書きのカナも、印字できない。このカナ・ラテン・タイプライターは、東京帝国大学の緒方知三郎の求めに応じて作られたものだったが、丸善は、これを受注生産という販売形態にしたようである。

一九七五年（昭和五〇年）に丸善は、自社ブランドのタイプライターを発売した。七五年に渡るタイプライター輸入販売に一応の区切りを付け、マルゼン・ポータブルタイプライターの販売へと舵を切ったのである。ただ、マルゼン・ポ

LUNGENTUBERKULOSE A HEILBAR デアル。ソノ KLINISCH ノ BEOBACHTUNG カラ アキカ デアル。 BEGINNENDE PHTHISE ノ SICHERE ZEICHEN A ムトヨリ, TUBERKELBAZILLEN モ NACHWEISEN サタ ヨウナ ヒトガ、チニ フタタヒ GESUND トナリ、シカエ DAUERND ニ GESUND ニ BLEIBEN シテ イル コトハ スクナク ナイ。 マタ カカル AUSHEILUNG ガ ハナハタ オイ コトハ、 ANDERE KRANKHEITEN デ STERBEN シタ ヒト ノ SEKTION ニ アツテ、フルイ TUBERKULÖSE HERDE ノ NARBE ラ LUNGENSPIITZE ニ イミダシ、 マタ VERKÄSTE BRONCHIALDRÜSE ノ VERKREIDETE RESTE ラ ミルコトガ HÄUFIG デアル コトカラ 亮 ワカル。

(MEHRING: LEHRBUCH DER INNEREN KRANKHEITEN. ノウチ MÜLLER ノ フシヨウ カラ。)

図3 カナ・ラテン・タイプライターの印字見本

ダブルタイプライター・モデル200は、シルバー精工のシルバー・リード720に瓜二つである。ローヤル202ポータブル・タイプライターにも、瓜二つである。プラスP W 72にも、瓜二つである。これらは全て、シルバー精工が製造していた。当時の広告（二八頁参照）によれば、丸善の伝統と技術が熱く息づいていたらしいのだが、さて、いったいどこで息づいていたのだろうか。

（やすおか・こういち 京都大学人文科学研究所教授）